

# 《資料紹介》 大型遮光器土偶と環状注口土器

—— 鷹巣町高森岱遺跡発見の遺物から ——

高 橋 忠 彦

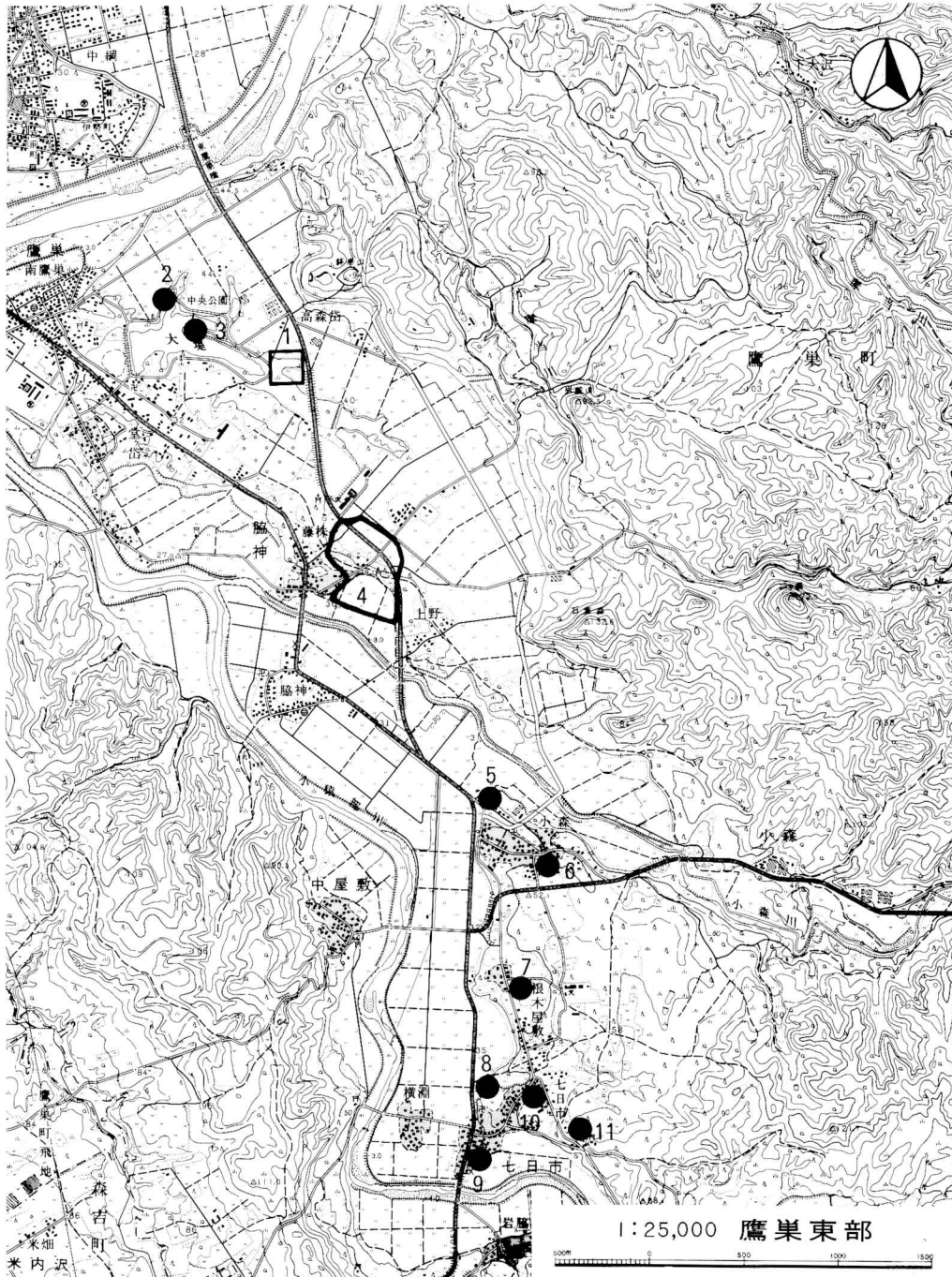
## 1 はじめに

ここに紹介する大型遮光器土偶をはじめとする遺物は、鷹巣町在住の大川雄一氏が所有するものである。氏によればこれら遺物は、昭和56年農業用排水路の掘削土とともに残置されていたもので、幾度となく現地を訪れた氏によって発見収集されていたものである。発見場所は、秋田県遺跡地図(県北版)によれば、秋田県北秋田郡鷹巣町脇神字高森岱16に所在する高森岱遺跡で、遺跡地図では同遺跡は縄文時代前期・中期の遺跡であるとされている。

## 2 遺跡の位置(第1図)

高森岱遺跡は、鷹巣町の東部 J R 鷹巣駅から南東に約2.8kmで、標高40～50mの段丘上に位置している。遺跡の北側1.2kmには米代川が西流していて、遺跡のある段丘もこの米代川によって形成されたものである。遺跡に隣接して西側には鷹巣中央公園があるが、ここには東西に細長い大堤と呼ばれる河跡湖があり、これは米代川の支流の残存湖である。

こうした地形的環境の中で高森岱遺跡周辺には多くの遺跡が確認されている。高森岱遺跡の南2.5kmには、かつて喜田貞吉や清野謙次らが調査を行い、秋田県教育委員会による昭和55年の調査では100基にも及ぶ縄文時代晩期の土坑墓が発見された藤株遺跡がある。また遺跡の周辺特に中央公園内には、縄文時代後期の香炉形土器(秋田県立鷹巣農林高校所有)が発見された石の巻岱Ⅱ遺跡や石の巻岱Ⅰ遺跡(縄文時代後期・晩期)があり、いずれも標高40m前後の段丘上に位置している。さらに南方の七日市地区には根木屋敷岱Ⅱ遺跡や囲の内遺跡など縄文時代の遺跡群が点在している。



- 1.高森岱（晩期） 2.石の巻岱Ⅰ（晩期） 3.石の巻岱Ⅱ（後期） 4.藤株（前期～晩期） 5.タモノ木（中期） 6.小森（晩期）  
7.根木屋敷Ⅱ（後期・晩期） 8.山の上（中期） 9.囲の内（後期） 10.石倉岱（中期） 11.伊勢堂岱（前期・中期）

（1991,秋田県教育委員会「秋田県遺跡地図（県北版）」に加筆）

第1図 高森遺跡と周辺の縄文時代遺跡

### 3 紹介資料

#### 大型遮光器土偶(第2図)

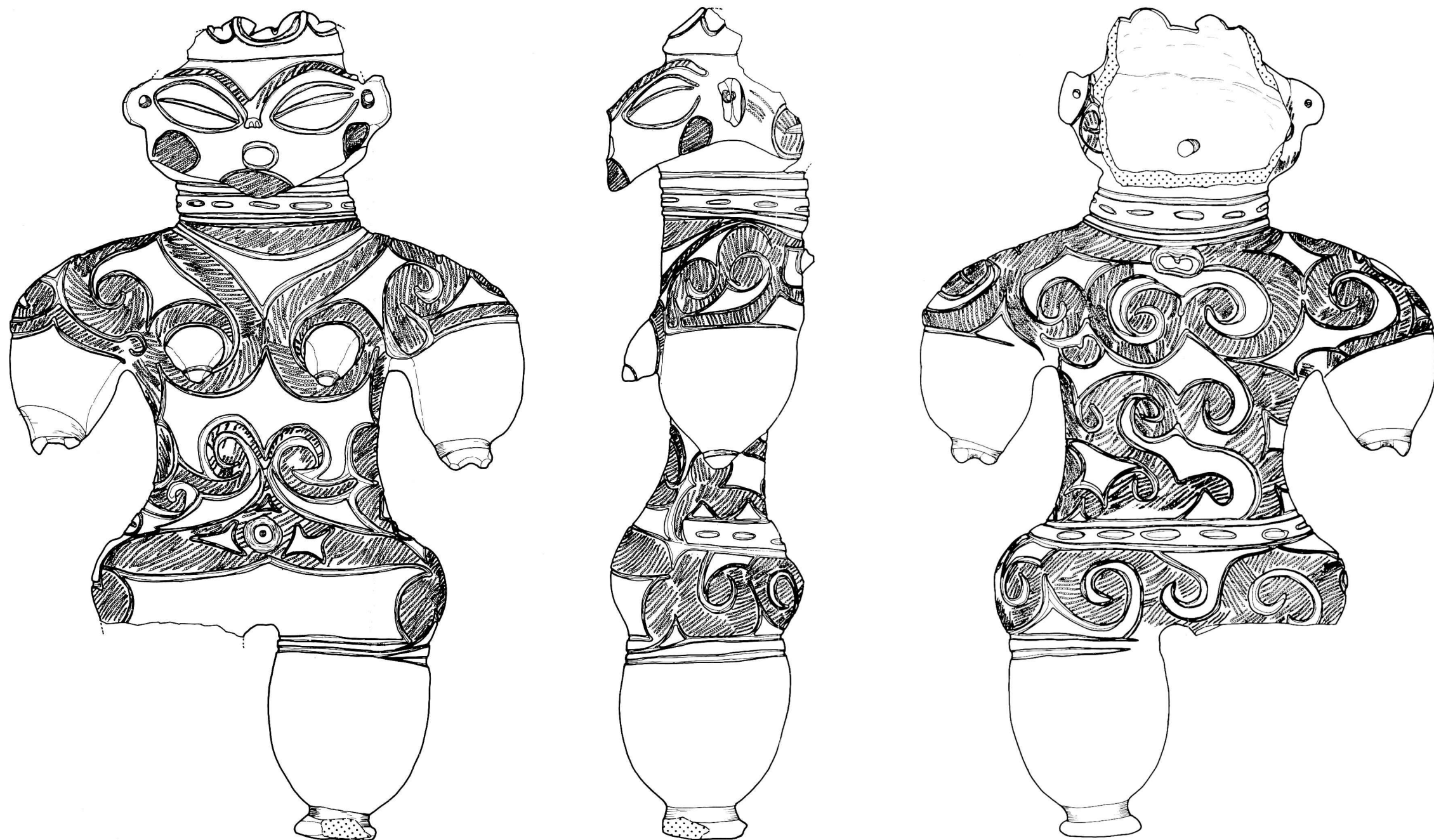
後頭部と右足を欠くが、身長34.5cm、肩幅20.0cm、重さ1.24kgの中空の大型遮光器土偶である。顔と上半身に赤色顔料の痕跡が明瞭に残っている。頭部は、王冠状の下が一度くびれ、顔面にいたる。顔は鼻から眉は隆帯で、目は沈線で表し、口は円孔である。顔全体はやや角張っていて、顎の部分はかなり張り出している。耳は鰭状になっていて円孔が穿たれる。顎と両頬には円形の縄文部があり、眉にも縄文が付される。頸部は長さ2cmほどで、中央には楕円形の刻みを持つ幅の広い隆帯がありこの上下を2条の深い沈線が巡る。体部は大きく張る肩、くびれたウエスト、大きく膨らむ腹部と臀部で全体の重心は低く感じる。乳房は紡錘状で下向きとなり、腕、脚は丸い円柱状で、手は二股に分かれ、脚先も丸く抽象化されている。体部の文様は縄文帯による大小の渦巻文で構成されている。襟元には中央部が幅広い縄文部が、その下にはY字状の無文部があり、肩の上方から襷状に伸びてきた縄文帯は両方の乳房を巻き込む。上腕から肩にかけても渦巻文が描かれる。乳房の下には広い無文部があり、腹部中央には、向かい合うこれも渦巻文がある。膨らみのある腹部下半には中央の円孔を囲む3個の三叉状の沈刻のある広い縄文帯が両側に伸びる。下腹部は広く無文で黒色に研磨されている。

後頭部、耳の裏側には小さな渦巻文がある。背面には上部中央にコブ状の突起が付され、向かい合う渦巻文が二段施される。臀部との境には頸部と同じ楕円形の刻みをもつ隆帯が巡り、臀部中央にはフック状の無文帯がありこの左右に渦巻文が配されている。

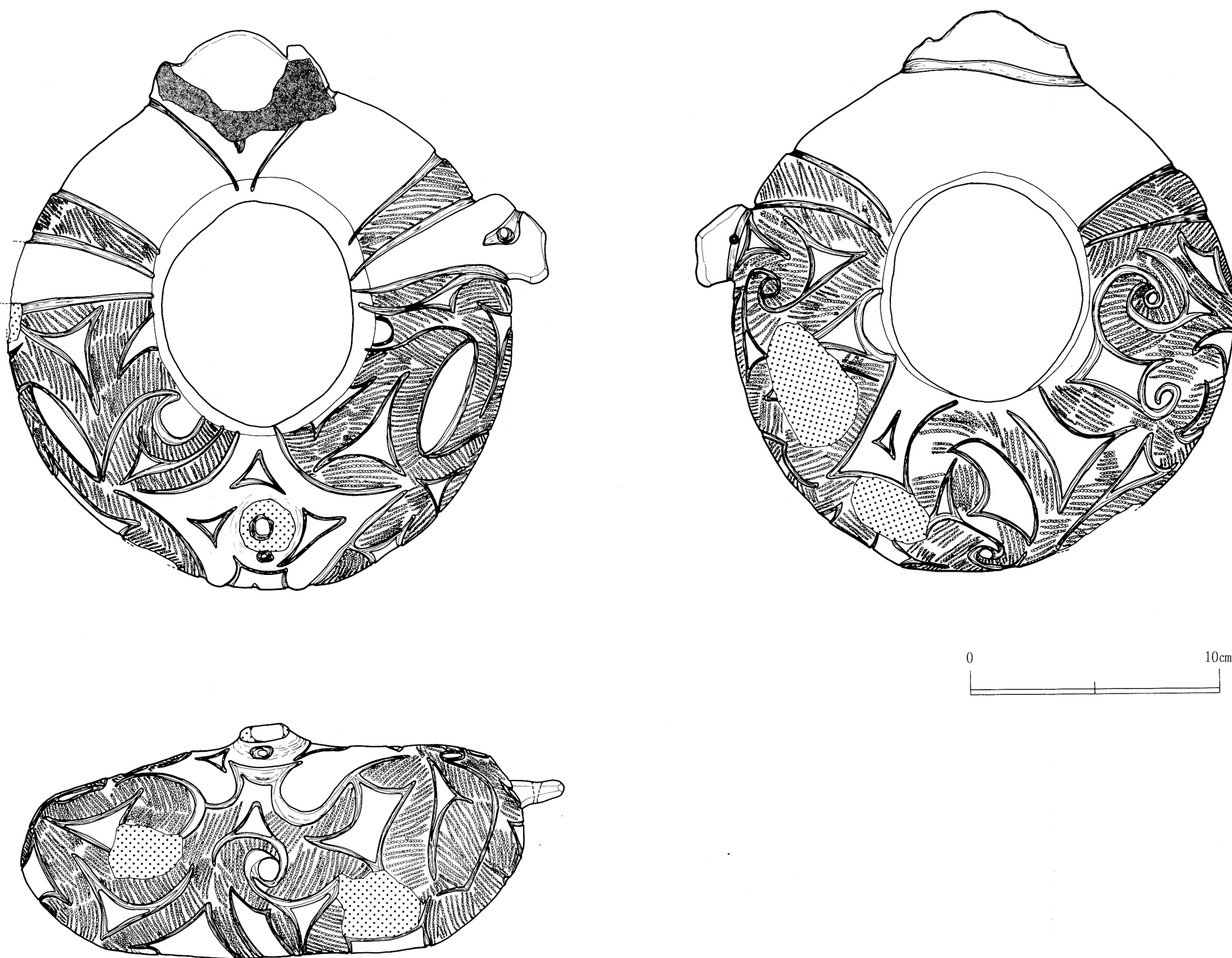
縄文は、L Rの原体による。

#### 環状注口土器(第3図)

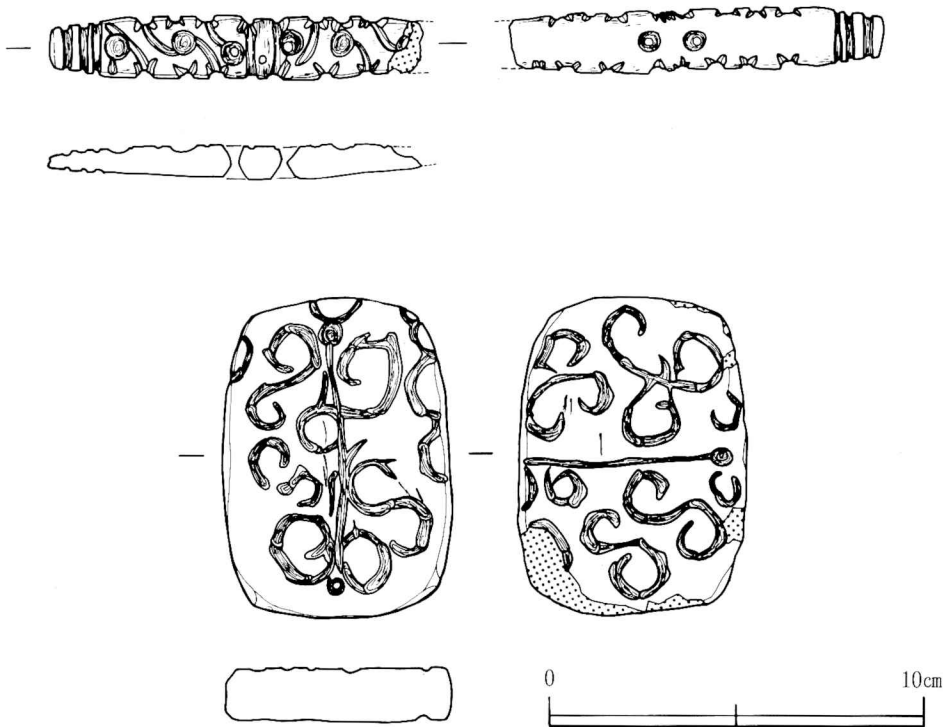
直径20.2cm、内径7.8~9.0cmの環状注口土器であるが、注入部内側にアスファルトで接合補修した痕跡が明瞭で、おそらくはこの部分に注口部に向く人面が付いていたものと考えられるものである。体部の太さは、注口部が8cmと最も太く、注入部に向かって細くなる。注口は上を向き、これを3個(上・左右)の三叉文が囲んでいる。注口部の下には渦巻文が描かれ、これを中心にして左右に対称の渦巻文と三叉文で構成される文様が施されている。体部には一段高い帯状の無文帯があり、これから外に向かって穿孔のある鰭状の突起が付されている。注入部には、前記したとおり、人面が付いていたと考えられる部分があり、この部分を2条1組の沈線が襟元を表すかのように囲んでいる。人面の裏側は、舌状に飛び出している。全体に明褐色を呈するが、底面は褐色で、鰭状の突起部分に赤色顔料の痕跡が認められる。文様帯に施されるのは、R L原体による細かな縄文である。



第2図 大型遮光器土偶



第3図 環状注口土器



第4図 石製筭・岩版

#### 石製筭(第4図)

残っている部分で長さ10cm、最大幅1.7cm、最大厚0.9cmの粘版岩製のものである。研磨によって全体を整形した後、中央に2個一対の孔を穿ち、それを中心に円孔と沈線による文様を彫り込んでいる。沈線が終結する側縁部分は深く抉りこまれる。端部は丸く磨き出され、深い3条の沈線が巡る。全体に赤色顔料が残り、復原すると11cmほどの長さになるだろう。

石製筭には、岩手県蒔前台遺跡のものが有名であるが、これにも中央に2個一対の孔が穿たれ、長さ、形状とも比較的似ているものである。

#### 岩版(第4図)

8.5×6.1cmの方形に近い、黄褐色を呈する凝灰岩製のものである。片面は長軸に、片面は短軸に沿った直線を中心として、S字状の文様が対象に配置されている。文様を描く彫り込みは比較的粗雑で、短い彫り込みを連結させてS字状文を表現している。全面に赤色顔料が残っている。

## 4 おわりに

以上紹介した4点の遺物は、施される文様などから縄文時代晩期の前半、大洞B式期のものと考えられる。大型遮光器土偶は、公表されている中では宮城県恵比寿田遺跡(高さ36cm)や青森県亀ヶ岡遺跡(高さ34.8cm)の土偶に次ぐ大きさであろうと思われるが、秋田県内では藤株遺跡出土の2点の土偶(東北大学所有)も現存高(21.5cmと18.5cm)から推定すると大型の遮光器土偶の範疇に入るものと思われる。環状注口土器は、管見ではこれまで北海道の忍路土場遺跡や宮城県宝ヶ峰遺跡などにその出土例があり、また県内でも大館市の萩ノ台Ⅱ遺跡から出土している。これらは、いずれも台付きの土器で縄文時代後期中頃から後半に位置付けられるものである。さらに人面付環状注口土器においては、秋田県昭和町の狐森遺跡の例(国指定重要文化財―秋田県立博物館所有)が有名であり、また平成4年に発掘調査が行われた同県森吉町の白坂遺跡でも1点出土している。前者は、紹介資料と同じく人面が注口部を向くが、後者の白坂遺跡例は人面が外側を向く台付きの土器である。2例ともコブ付き土器様式のものであり、高森岱遺跡の本例は秋田県内では最も新しい時期のものと言える。

高森岱遺跡については、これまで全く調査が行われていない。4点の紹介資料をはじめとする採集品から推測して晩期前半の貴重な遺跡と考えられることから、今後範囲確認調査などを実施し、遺跡の広がりや性格をより正確に見極める必要があると思われる。

最後に、これら貴重な資料の公表を快諾された大川雄一氏をはじめ、作図、写真撮影に協力いただいた松尾睦子氏、また土偶について種々の教をいただいた武藤祐浩氏に深く感謝いたします。

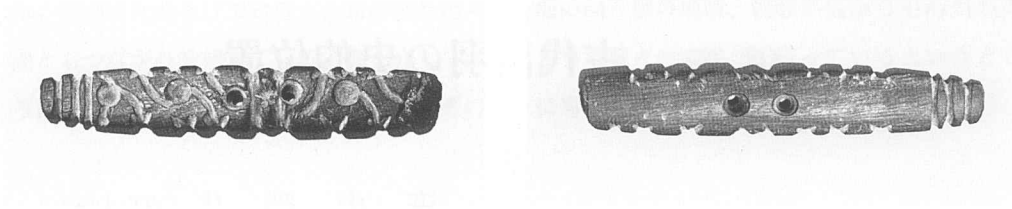
平成4年の2月、初めてこの大型遮光器土偶を目の前にした時、筆者はまるで赤子を抱えるようにして手に取った記憶が今でも鮮明に残っている。また同時に実見した環状注口土器など一連の遺物発見の経緯を聞くにつれ、言いようの無い寂寥感を感じたものである。願わくば、このような重要な遺物を資料紹介という形でしか公表できないという状況が今後二度と繰り返されないことを祈りたい。



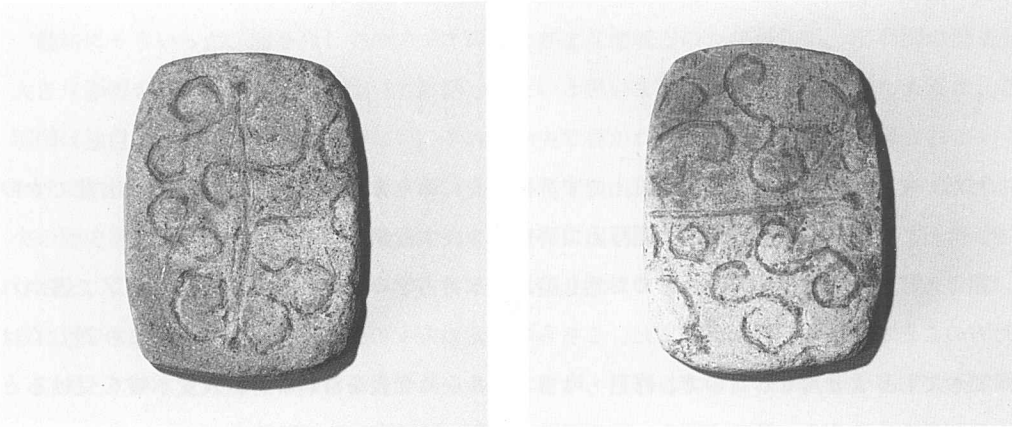
大型遮光器土偶



環状注口土器



石製筭



岩版



遺跡近景（東▶西）